

「すべてをやり遂げた」

詩篇 第42篇1～5節
ヨハネによる福音書 第19章28節～30節

説教 村上修平牧師

「神よ、しかが谷川を慕いあえぐように、わが魂もあなたを慕いあえぐ」(詩篇42篇1節)。この詩篇が書かれたパレスチナ地方は、水の豊かな日本と異なり、乾期には谷川が干上がるほど乾燥した地域です。鹿は切実に谷川を慕い求めていたでしょうから、この詩篇の作者の魂が慕いあえぐほどに、切実にあなた(神)を渴き求めていることがわかります。詩篇には他にも、22篇、69篇など、神を求め、愛を求めて渴き苦しんでいる人の話が出てきます。

ヨハネによる福音書19章28節に主イエスの十字架上の言葉が記されています。「そののち、イエスは今や万事が終ったことを知って、『わたしは、かわく』と言われた」。十字架上で長時間、想像を絶する激しい痛みや渴きと戦い抜き、その最期に語られた言葉です。この『渴き』は、のどの渴きだけではなかったと思います。神からも、人々からも見捨てられた主イエスは、しかしなお、神や人々の愛を渴き求めていたのではないのでしょうか。そしてヨハネ福音書の記者ヨハネは、詩篇に描かれた、神の愛を渴き求める人とは、この主イエスであると悟ったのです。そして、主イエスのこの渴きは、聖書が全うされるためであったと記したのです。そしてここから分かることは、私達が、愛を求めても愛されず、誰からもこの孤独を理解されないと渴いているまさにその時、実は主イエスが共にいて、一緒に渴いてくださっているということです。

『私は渴く』という主イエスの言葉を聞いた人々は酸いぶどう酒を含ませた海綿をヒソブの茎に結び付けて主イエスの口もとに差し出しました。もしかしたら、イエスの苦しみに心動かされた人々がその渴きをいやしてほしいと差し出したのかもしれませんが。「すると、イエスはそのぶどう酒を受けて、『すべてが終った』と言われ、首をたれて息をひきとられた」(30節)のです。死ぬ間際の極限状態にある主イエスは、最後の力を振り絞って、ぶどう酒を口に含まれたことでしょうか。イエス様は、私達が差し出すどんな小さな愛も喜んで受けてくださるのです。

この『終った』は受身形の言葉で新共同訳では『成し遂げられた』と訳されています。すなわち、主イエスの最後の仕事は完全な受け身であったということです。父なる神様の恵みの御

手に、自分のすべて、命までをも委ねてこの地上での仕事を完成させたということです。神様は私達に、委ねなさい、任せなさい、信頼しなさい、といつも言ってくださっています。けれど、私達は自分の力に頼ろうとし、結局うまくいきません。しかし神様に任せた時には、自分一人で行うよりも、はるかに素晴らしく、大きなことが成し遂げられるのです。しかしまた、私達は神様に委ねているつもりでも、自分の思い通りにいかないのがっかりします。そうではなく、結果も全て神様に委ねるのです。神様が最も良いことをなしてくださいませ。

パウロが書いたコリント人への第二の手紙の12章9節に「わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」とあります。この『完全にあらわれる』は、十字架上で語られた『すべてが終った』と同じ言葉です。神の恵みが、弱いところで完全に『成し遂げられる』というのです。主の十字架は、敗北であり、弱さの極みです。しかし、主イエスはここでも固く信じ「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」(マルコによる福音書第15章34節)と神に向かって叫ばれたのです。神に祈ったのです。今はわからないけれど、神はこの十字架を通して、私にとっても、みんなにとっても、よいことをしてくださると、完全な信頼をもって最後の仕事をやり遂げたのです。そして主の十字架はその後どうなったでしょう。世界中の人々に慰めと希望を与える象徴になりました。神様の恵みは弱いところに完全にあらわれるのです。

ここで使われた「ヒソブの茎」(29節)は、過越祭で、犠牲の子羊の血を浸す罪の清めの儀式に使われる植物です。ですから、主イエスが、私達の罪の犠牲の子羊であることが示されているのです。『私が血を流し、あなたの救いは私が完成した。この私の愛の中にとどまっていなさい』、主イエスはその様に語っておられるのだと思います。今ここに渴きをもって神様を求めている方がおられましたら、どうぞそれを神様の祝福だと思ってください。渴くほど神様を愛し、求めているという徴(しるし)です。そして神様は渴きをもって神を求める者に豊かに応えてくださいます。神を信頼し、平安のうちを歩ませていただきますように。

(記 説教要約担当者)

